拳もて机を叩きあうこともなし画面上に文字整然と
して　　森祐希子

ネット上の会議らしい。お互いの意見は、パソコン画面に打ち込まれる。上句、リアルな会議のシンボル的イメージとして、うまい。

通勤のバスへの投石茶飯事で霧の裏町に大麻（ウィード）はかを
る　　羽鳥潤

貧富の格差が思いっきり広がって、徹底的に貧困層にしわ寄せが行った格差社会をクローズアップする。荒涼たる光景、におい、音が、一首からたちのぼるような気がする。「裏町」はサンフランシスコの裏町。ニュースに決してならない、観光客が絶対に行かないような裏町である。

紫陽花はあぢさゐらしく濡れながらけふを限りの醜
を尽すよ　　櫂未知子

櫂未知子ひさびさの短歌である。「らしさ」を生きる紫陽花の今を「醜」と見ている。「醜を尽すよ」とは、「醜」に甘んじているのを批判する気分もあるのだろうが、それだけではなく、「醜」に淫しているニュアンスもあるのだろう。彼女の句「万緑の賞味期限の真つただなか」を思い出す。

信綱先生のひ孫のお子が一歳のお子抱き見上ぐ大人
のお写真　　松井千也子

作中の「一歳」は、信綱のひ孫の孫ということになるようだ。一読では分からない、言葉の迷路のような言い回しの面白さ。

知らぬ間に駅名覚えて夏がくる大濠公園、次は赤坂
　　海老原愛

「知らぬ間に駅名覚えて夏がくる……」が、うまい。まさに実感なのだろう。四月に入学したか就職したかして、はじめて福岡市に住みはじめたのだと思う。「大濠公園」「赤坂」は福岡の地下鉄の駅名。二日酔いで朝の大濠公園を散歩したのを思い出した。

五段抜き見出し三段、ベタとなり日常となる戦場の
死　　加古陽

太平洋戦争あるいは日中戦争時の新聞のバックナンバーを、何ヶ月、何年にわたって調べている場面らしい。この一首と並ぶ「ベタ黒の横凸版で英霊の美談が載る日それに慣れる日」ともども、戦死者の数が増えるにしたがって、新聞のあつかいが小さくなるのをうたっている。

太平洋戦争がはじまって間もなく、駆逐艦が撃沈されて戦死した私の叔父（母由幾の弟）の葬儀は、今でも覚えているが、早期だったので、町をあげての盛大な葬儀で、元帥まで参席していた。

引く潮のさらふが如き終はり来て出店ゼロの空きビ
ルの闇　　岡本尚真

空きビル、空き店舗が全国的に急増しているらしい。増えはじめると、一気に急激に過疎化してしまう。そのあたりの恐ろしさを表現する「引く潮のさらふが如き終はり来て」が的確。

短歌の現在

No.403　今月の15首を読む

佐佐木幸綱